

オセニック(株)代表取締役社長 柴田健一氏 講演  
「留学・遊学のススメ」

みなさん、こんにちは。今日はよろしくお願ひいたします。短い時間ですけれども、私の留学の経験のちょっと個人的な話になるんですけれども、私も別に留学の専門家でも何でもないので、個人的にどういふことを経験してどうだったかみたいな話をして、少しみなさんの参考になればと思います。ちなみにタイトルに「留学・遊学」ということを謳ったんですが、普通、海外で学ぶときには留学っていう言葉を使うんですね。遊学って言葉もみなさんご存知ですよ。今、遊学というと、1か月ちょっと遊びに行つて海外で学ぶみたいな、そういう使われ方をするらしいんですけど、元々は遊学も「故郷を離れて学ぶ」ってことらしいんです。なので、私の今回のタイトルは、いわゆる留学の意味と、あとは今風の遊学の意味で、海外で1か月か2か月遊びに行くような、そういう感覚の留学とか遊学でもいいんじゃないかなということ、あまり構えずに、海外に出てみるというのを勧めするという意味でこういうタイトルにしています。

私は、経験としては大体こんな感じなんです。長期でいうと高校の時に1年間、高校の2年生の夏から3年生の夏までですね、今はもうそうなつていふんですけれども、私の時から89年からようやく向こうの高校に留学してそこで取つた単位を日本の高校の単位にできるっていうのが認められました。それまでは2年生で行くと2年生に戻つてこなれば駄目だったんです。私の場合は、日本で初めて2年生で行つて3年生で戻つてくるっていうのをやつてミシシッピに行った時と大学院でボストンにいたとき、これが比較的長期で、下の方がちょっと短期みたいなものですね。まあこういう経験をしています。簡単に言うと、下の方は短期の方は楽しかつた思い出、上の方は結構意外に苦しかつたっていうか、為になつたんですけれどもしんどかつた思い出ということになります。

私ね、高校2年生の時にいふたんですけれども、初めに実際にいふたのが、ミシシッピに行く前にハワイに1か月寄つていまして、海外には旅行ではいふたことがあつたんですけれども留学じゃなかつたんで、真つ先に行つたのはハワイのこういう場所なんです。これが私のいふたハワイのオアフ島なんですけれども、この上がこれ大学なんです。素晴らしい環境で、ハワイ・ロウ・カレッジって今はちょっと名前がかわつていふたんですけれども、1か月間学んだ場所がこの大学で、暮らしたのはホームステイ先はここにあるように素晴らしい環境で、すぐ近くにこういうビーチがあつて、もう天国のような日々でして、ここで1か月を私は過したんです。高校2年生で、まさか世界にこんな楽園があるのかと思うような所に暮らした後に、ミシシッピという所に行つたんです。これがまた結構落差がすごくて、みなさんこれから留学されようってことだと思つて、いろんな世界の国に行かれるんだと思つていふたんですけれども、本当にいろんな環境があります。

私はどういふ経緯で留学したかというと、高校がクリスチャンの高校で、アメリカの高校と1970年代くらいから提携してつたんです。で、毎年4人の高校生を4つのアメリカの高校に送り、アメリカのその4つの高校からも一人一人日本に来るっていう、まさに交換留学ってやつてつたんです。実は私は留学をものすごく志してつた訳ではなかつたんですけれども、たまたま友達が留学の試験を受けるっていうんで受けてみようって、それが何かうまくいって留学できることになつたんです。で、正直言うと留学が決まつた時に嬉しかつたかって言うと、実はあんまり嬉しくなかつたんです。すごく不安で。留学、ヤッター嬉しいって感じじゃなかつたんですよ。それから1年、英語もたいしてできない訳で、はたしてそのミシシッピに行つて、これから一体どうなるんだろうっていうのがものすごく不安で、まだ高校2年生でしたのでそういう記憶があります。それがきっかけでアメリカに行つたんです。

みなさんミシシッピってご存知ですか。場所、ほとんど知らないと思つていふたんですけれども、ここにあるんですよ。ディープサウスっていわれる所なんですけれども、アメリカの中でもミシシッピ・アラバマ・ジョージアっていうのは典型的にディープサウスって言って、ほとんど外国人が行かないような所ですね。多分みなさんがよく行くのはカリフォルニアとかニューヨークとかね、まああとシカゴやワシントンとかこういうところは行く経験があると思つていふたんですけれども、まあこういう所ってなかなか行かない所で、人口が大体300万人くらいで、日本でいうと茨城とか広島県とかね、そのくらいと同じなんです。だから、

人口はそれなりにいるんですけど、広さでいうと北海道の1.5倍くらいあるんです。人口密度で言うと、日本で人口密度が一番低いのは北海道なんですね。その北海道のさらに1/3くらいなんで、私大阪出身で、大阪の都会で過ごした人間としては、とんでもないところに来たなというのが第一印象でした。これ私が実際に撮った写真じゃないですけども、ハワイからミシシッピに行って飛行機の窓から景色を見るんですけど、見えた景色がだいたいこんな感じなんです。森なんですよ。飛行場に降り立つときも、どこに飛行場があるかわかんないくらい森だったんですよ。もう本当に不安ですね。トム・ソーヤの世界なんですよ、まさに。私は生活できるのかって、本当にびっくりした記憶があるんです。ミシシッピのジャクソンっていうのが最大の都市なんです。そこが州都で人口がだいたい17万人くらいかな。17万人っていうと、埼玉でいうとだいたい新座市とか狭山市と同じくらいらしいんです。あれだけ広大な土地に州都として17万人くらいの人しかいないので、まあまあものすごい田舎ですね。ダウンタウンもあるんですけども、こういう所はあまり普段行かないので、私が生活していた所は住宅街で、ちょっと行くと綿花畑、ミシシッピはコットンの産地なんですね。みなさん学んだかもしれないですがプランテーションが盛んで、昔、南北戦争の時代にアフリカから連れてきた奴隷たちをこういうところで働かせていたわけですね。ちょっと足を延ばすと、これミシシッピ・リバーですね。広大な土地にあるわけです。私が暮らしていたのが、だいたいこんな場所なんです。これはグーグルからとってきたんですが、私の記憶を頼りに住所を調べると多分ホームステイしていたのがこの家だと思うんですよ。こういう形なんです。これ見てわかるとおり日本とは全然違いますよね、埼玉とね。とにかく歩いてどこにも行けないという素晴らしい環境でして、歩いて本当にお店に行けないんですよ。たぶん1時間くらい歩けば、お店もあると思うんですけど、とにかく車でしか生活できないっていうなかなか面白い社会で、ここでホームステイしたんです。ミシシッピっていうのは、さっきもちょっと言いましたように黒人の人口が多いんですね。だいたい37%くらいなんです。全体では平均すると12%くらいなんです。3倍くらいあると。で、日本人はほとんどいないんですね。アジア人っていうのは人口の1%にしか満たないくらい。全体では多分アジア人って4、5%くらいはいるんですよ。でも、アジア人もまさかこんなところには来ないだろうってことで、私も1年いたんですけども、本当に日本人を見る機会がなくて話す機会がなくて。1軒だけ日本料理店があって、そこで少し話す機会があったというくらいで、まあそういう所で過ごしていました。

学校はこういう所で、何かすごく華やかな感じがしてね。すごく大きいんですけども、野球場が2つあってフットボール場があってトラックがあって、あと、こういう天文観測所があるんです。で、こんな感じで学校があって、学校はほとんど白人ばかりです。裕福な白人の人たちが学ぶ所で、なんかミシシッピの人口構成から全然違うんですけども、こういう私立高校の、この界限では一番有名な高校というか、非常に学費も高い高校で。交換留学で行っているんで学費払わなくていいんですけど、まあすごく高いんです。アメリカっていうのは、みなさんご存知かどうかかわからないんですが高校も大学もとにかく格差がすごいんですよ。こういう高校に行くと年間の学費が150万円くらいするんですよ。一方で公立の高校に行くとか無料とかね。なので、そういうすごい格差をここで私は目にしたなあというふうに思っています。

興味があれば、ミシシッピって多分みなさんほとんど興味ないと思うんですけど、見たこともないことを見られます。これはちょっと古い映画ですけども「ミシシッピ・バーニング」という映画です。これは1960年代のミシシッピで実際に起こった事件を題材としています。あと最近でいうと「ヘルプ」って知ってますか。これ映画になっているんですけど、これも面白いんでぜひ見ていただければ。これは本なんですけれど、ちょっと変わった本で「私のように黒い夜」っていうんですが、南部の差別について書かれた本で、とても面白いというか興味深い本なんで、ぜひ読んでもらえればと思います。ミシシッピに行って僕が感じた事なんですけれど、日本との違いは、さっき言った車なしでは移動できないことについてすごく不便に感じて、日本って子供でも一人で電車に乗ってどこかへ行けるっていう素晴らしい環境なんですけれど、ミシシッピは本当にね自分で運転できるようになるまでは、親とか知り合いに連れて行ってもらうんです。毎回毎回頼まないといけない社会なんですね。それが私は結構辛かったということがあって。あと、マイノリティ体験とでもいうんですか、日本人なんてまずいない訳です。まあアジア人がいないんですからね。初めてマイノリティになるということを体験したんですよ。さっき理事長からもお話があったようにグローバルな視点とか、まあ世界中でいろんな人が暮らしている中で、日本っていうのは極めて均質的な所ですので、自分がマイノリティであると考えerことは無かったわけです。それが高校2年生の時初めて、自分はこの社会においては極めてマイノリティなんだっていうのをすごく実感した覚えがあります。あと、ク

ラブ活動もセメスター制で日本とはちょっと違うんですね。いろんな経験ができました。私にとって一番強烈だったのは、できない子の体験っていうのですね。できない子だったんです。当たり前ですね。高校2年生で、英語も学校でしかやったことがないですから、いきなり行っていきなり授業に出るわけですよ。ミシシッピの私が行った学校っていうのはほとんど留学生のいない高校ですので、あんまりサポート体制ってなくて、とにかく授業に出てくれと。ですから、アメリカン・ヒストリーとかアメリカン・リテラチャーとか、とにかく出るんですよ。それが何を言っているんだかわからなくてとにかく座って、一生懸命聞いて理解しようと。たまに「ケンはどう思う？」って言われるんですけど、とにかくよくわからない、何も言えない。こんなにできない子だったのかというほどできなかったんです。結構辛くてね。どうですか、みなさんこういう所に来ていらっしゃるということは留学に興味を持っている、これから留学したいという方が多いと思うのですが、留学っていうのももちろんね、楽しいんですよ。ただ、留学体験というと、こんなに楽しいことがあったとか、ものすごくフィーチャーされるじゃないですか。私も留学に行く前にそういう経験を読んだので、何かアメリカに行くとかすごいことが起こるんじゃないかと思ったんですが、まあとにかく私の出会ったのは、自分で移動できない、何言ってんだかわかんない、授業についていけない。とにかくしんどかったですよ、正直言うと。初めの1週間は本当に辛くて、初めの数か月も同じように辛かったです。ただ、もちろんその後慣れていって初めの辛さっていうのは今では結構忘れちゃったんですけど、当時はやはり辛かったです。みなさんは留学にいろんな希望を持って行かれると思うんですけど、やっぱりそれなりに勉強しよう、向うの社会に溶け込もうと思うと、それなりに一生懸命やろうとすると、そんなに毎日毎日笑って暮らせる訳ではないと思うんですよ。なんで、まあそういう時に私の体験とか思い出していただければ。世に見る留学体験は薔薇色ばかり書いているんだけど、実際に行くとかやっぱりいろんな経験があるんです。なので、私的には最終的にはものすごく良かったと思っているんですけども、実際は結構大変で、いろんな思いをしてやっぱり半年くらいはかかりましたかね、慣れるのね。半年くらい経つと環境に慣れて、楽しいというか毎日充実しているって感じがすごく出てきたんですけど、それまでが結構大変でした。

高校生の時に留学して良かったことの一つは、とにかく予想外の偶然の出会いというのがありました。日本にいと高校生にもなると何でも自分でできるじゃないですか。クラブ活動も自分で選んで、こういうことやりたい、例えばサッカーやりたいのであればサッカーやると。塾に行きたいのであれば塾に行くと。ピアノ習いたいのであればピアノを習うわけじゃないですか。そうするとね、何か予想外のものに出会うという機会って、あるんですけどもあんまりないですよ。ミシシッピに行って私はどういう状況かという、いきなり放り込まれる訳ですよ、そのよくわかんない状況に。なので、何かよくわかんないだけじゃなくスペイン語とって、ヨットやったりクロスカントリーやったり、とりあえずこれをやってみようって誘われて、天文学の授業をとって、解剖学の授業をとって、多分日本にいと自分の好みからしてまずやらなかったであろうものをとにかく一生懸命やる。ある意味強制的にそういう状況に放り込まれたっていうのは、とてもいい経験だったかなと思っているんです。これがその後どう役に立ったかという話よりも、実はこの後スペイン語を大学で学ぶので繋がってくるんですけども、日本で自分がこういうのが好きだからやるっていうんじゃなくて、自分の可能性ってやっぱり自分じゃ気づかないことが多いじゃないですか。それを向こうに行くことで予想外のことにすごく出合って、それがとてもいい経験になって、自分の幅を広げてくれたんじゃないかなあって思いますね。なので、みなさん海外に行くとか特にそういうことがあると思うんですよ。日本じゃ多分あり得ないようなことに出会ったり、いきなり放り込まれたりとか、いきなり経験したりとか、それが私にとっては今ものすごく大きな財産になっているかなと思います。

みなさん気になるところで、英語は上達したのかどうかという話なんですけれども、すごく上達しましたよ。1年だけなんですけど、高校生ってね、10代の頃ってすごい吸収力があるんですね。また、私的には1年間日本人に会わなかったんで、当時インターネットもないわけですから。まず日本語で読むものが無いんです。喋る機会がない、聞くこともない。全部無かったですよ。なので、1年経つと本当にもう日本語を忘れかけるような感じで、上達しましたね。これがカリフォルニアとかだとちょっと話が違ってもいいかもしれませんけれどね。私はミシシッピに行ったおかげで結構上達して、それが大学受験に役に立ったかと聞かれるのですが、ものすごく役に立ったんです。人によってはアメリカに行っても受験英語とそれはまた別物だっていう話があったんです。私もそう思っていたんですが、高校で一生懸命授業についていこうと思って文学読んだり歴史の本読んだりとか、一生懸命やったんですよ。だから読み書きの力がすごくついて、あとテストも普通の学

生と同じように、まあ無理はあったんですけど、何とかして受けようと思ってテストもこなしてましたんで、結果的に読んだり書いたりとか、喋ることももちろんなんですけれど、大学受験は結構楽しめたね。能力もついていたので英語を読むのもすごく速かったんです。私は高校2年から3年まで行ったので半年くらいしか受験勉強する期間がなかったんですけども、結果的にはそれで問題なかったですね。ただ、人によっては同じ時期に留学した学生を知っているんですけど、学校の勉強とかにあまりついていかに比較的遊んでいる感じでね。「楽しかったー！」って言っている人に限って、その後実はあんまり英語の力がついていないっていうのがあります。会話っていうのはね、慣れれば誰でもできるんです。当たり前ですけどアメリカ人全員会話しますからね。ただ、読み書きっていうのはトレーニングが必要なんですよね。なので、アメリカ人ですら、しっかり英語の教科書、例えば新聞とか雑誌とか少々難しいテキストを読めるかっていうとそうじゃないんですよね。それはアメリカ人ですらトレーニングが必要なんです。なので、日本人ならばなおさらなんですけれども、そういうトレーニングをやって授業についていこうとした結果、それが受験にも役に立ったなあと思っています。もし高校生で受験が心配という方がいらっしゃったら、それは個人的な体験としては、一生懸命やればあんまり心配する必要はないかなあと思います。あとちょっと追加すると、パーティーとか結構あるんですよ、アメリカ人パーティー好きじゃないですか。それがあんまり得意じゃなくて、特に言葉がわかんないでしょ、それであんまりおもしろくないんですよ。日本語でわかっちゃいいんですけどね。それが多少苦痛なことも正直言ってありました。こんな感じのみんなで華やかに遊ぶんですけども、やっぱり言葉わかんないという辛いんですよ。ただけどまあ逆に言うとそれがすごい良かった、つらい経験っていうのがね。「言葉わかんないなあ自分は」っていうのが個人的にはいい経験だったかなというふうに思います。

それで日本の高校に帰ってきて半年で卒業して大学に行っただけなんですけれども、その時アメリカの大学に行くっていう選択肢もなくはなかったんです。アメリカに1年いて、もちろん英語もある程度上達して、このままアメリカの大学に行くっていう選択肢もあったけれど、やっぱり英語だけでやっていると本質的に自分の理解力っていうのがどうしても厳しいなって思ったんです。このまま4年間アメリカでやっていると、勉強って意味では、僕がやりたい勉強が本当にできるのかなって不安もあって。金銭的にもアメリカに留学してっていうとそれなりに負担がかかりますので、大学に入ってから1年留学すればいいかなって思ったので、特にそこはあまり気にせず日本の大学に入ったんですね。外語大に入ったんですけど大学時代は4年で卒業しておまして、実際に留学はしていないんです。世界中旅行はしたんですけど。今から考えれば本当は留学しておけば良かったと思うんですけど、当時は先に早く仕事をして大学院に行きたいと思ったんです。なので、もし今高校生の人で大学に入ってからと思っているのだったら、大学に入って留学するのもいいかなと思いますね。当時チャンスがあったことにはあったんです。スペイン語圏に行くっていう選択肢とか、ルーマニアの大使館で募集していたんですね。ルーマニアに行く留学生って、ほとんど応募する人がいなかったんで、応募すれば行かせてもらえる感じだったんです。今ではすごくもったいない話だなと思いますが、私には今ひとつ勇気がなくて、スペイン語圏に行くとかルーマニアに留学するとかって、一体何をやるんだろうと思ったんです。今から考えれば違って、あともう少しでお話しますけれど、そういう実はみんなが行かない所へ行くとけば良かったなっていう思いが正直言ってあります。もちろんアメリカとかイギリスとかメジャーな所に行くのもすごくいいんですけども、そうじゃない所、他の人が行ったこともないような国に留学するというのも実は良かったのかなあって考えると、そこが多少心残りです。

ただ、私自身は日本の大学で勉強できて良かったなとも思っているんです。留学はしていないんですけども、いろんなことを身につけて、それが次の留学に繋がったっていうのがあって、それはそれで良かったなって思っているんです。大学を卒業して、日本生命っていう会社に入って海外関係の仕事をしていました。もともと外語大にいたので海外にはすごく興味あって国際機関で働きたいっていうのがあったんですね。ただ大学卒業してすぐ国際機関っていうのはなかなか難しいんで、しばらくしてから思ったんです。まず初めに仕事をして良かったのは、仕事をして考えが変わるっていうことよくあるんですね。仕事をしていない大学生の考えるイメージが、仕事してから「ああ、やっぱりこういう仕事がいい。」というふうに変ったんですね。大学時代であれば国際関係とか開発とか、そういう留学を僕はしていたと思うんですけども、仕事を2、3年して経営学を学びたいと思ったんですね。そこが自分としては良かったかなと思うんです。いきなりその当時の興味で留学しなくて、少し仕事をしてみたら自分にとって何が合っているのかっていうのも、考えながら留学したっていうのが結果としてはすごく良かったなというふうに思います。私はそれから経営学を学びに行っただけ

すけれど、就職する時にどういうこと考えていたかという「プロフェッショナルになる」ということを考えていたんです。私の定義だとプロフェッショナルっていうのは、どんな組織に行っても通用するような人で、そうなりたいなと思っていました。だから、卒業して20年とか経って一つの会社にしがみついてこの会社でなきゃ生きていけないとか、この会社から放り出されるとなかなか他に仕事が見つからないというふうにはなりたくないなと思ったんです。20年経っても30年経っても常に自由で、どこか他の会社で仕事しようとか他の国で仕事しようかと思って、仕事ができるような力を身に付けたいなと思って、それが自分の仕事のテーマだったんです。日本の会社に入って周りを見渡して、残念ながらそういう人はあまりいないって思ったんですね。まあちょっと若気の至りなんですけれど、上司とかを見て、はたして私は10年後20年後にこうなりたいのかなって思って、何か違うなって思ったんです。今若者がすぐ会社を辞めるって非難されるんですけども、実は私もそのはしりでしてね。3年して会社に見切りをつけたというか、このままでは自分が思ったような人にはなれないかもしれないというすごい不安があったんで辞めようと思って。それでアメリカに留学したんです。

それでボストンに行くんですけど、ボストンに行く前に途中にミネソタ州のダルスという五大湖の端っこのほうで1か月くらい遊んで、遊ぶという一応勉強してたんですけど、ここは楽しかったです。さっきの話と同じで、ミシシッピ行く前にハワイに行ってすごい楽しかったけれど、ミシシッピに行って現実を見たっていう感じだったんです。これもまさにそんな感じです。その1か月のダルスでの生活はみんな和気あいあいですごく楽しかったんですけど、ここからボストンに飛ぶんです。ボストンではやっぱり苦労しました。ハーバード大学っていうのはもちろん世界的に有名な大学ですけど、勉強する環境としてはとてつもなくいいですね。図書館がなんと90個あるんですよ。そのうちの何十個は24時間営業してます。勉強するという意味では最高です。ハーバード大学って何がすごいかっていうと、資金がすごいんですよ。私調べたらだいたい日本円で大学に4兆円あるんです。2番目に資金を持っているのはイエール大学なんですけれど、有名な大学ですが2兆円なんです。ですから4兆円は突出してます。例えば日本の慶應大学はというと、300億円くらいなんです。アメリカの大学ってものすごい資金力なんです。その資金力で何をやっているかという、設備を整え、世界中から優秀な教授を集め、世界中から優秀な学生を集めてということをやっている。なかなか日本の大学には敵わないものがあります。こういう所で学ぶっていうのはなかなか得難い経験で、ただ学費もすごく高かったです。ビジネススクールは1年間で5万5千ドルくらいしますかね。授業料だけで日本円で5、6百万円くらいです。学部でも4万ドルくらい、5百万円くらいします。それってすごく高いじゃないですか。普通は不可能ですよ。だけど学部生でもほとんどみんな奨学金をもらっています。確か、世帯収入が6万ドル以下、日本円で6百万円以下の場合、学費は無料なんです。世帯収入が2千万円くらいまでは世帯収入の10%くらいまでしか払わなくていいんですよ。だから、実際は合格したけれどもお金がなくて行けないっていう人はいないんです。ビジネススクールですら私の知り合いのアメリカ人で合格したんだけどお金がないって大学に言ったら、わかった、貸してあげるって貸してもらっている人もいました。だからアメリカの大学ってそういうところが寛容なんですよ。お金はあるんで、優秀な学生であれば無料にしてもそういうのを取りたいっていう、奨学金制度をものすごく重視しています。あと博士課程の人はみんな無料ですから。無料プラス生活費にお金をもらっています。そういう非常に懐の深い大学なので、実は合格さえすればお金がなくても行けるんです。

アメリカの大学とか大学院の仕組みってみなさんご存知ですかね。アメリカにはいろんな大学があって、私立大学とか州立大学とかあるんですけども、私立大学にもハーバードみたいなユニバーシティと呼ばれる総合大学とリベラルアーツカレッジってご存知ですか。アムハーストとかウィリアムスとか。日本ではあまり知られていないんですけど、ものすごく優秀なリベラルアーツカレッジっていうのがあって、少人数で教育主体の大学なんですよ。ハーバードっていうのは研究主体の大学なんです。そういうリベラルアーツっていう教養大学っていうのは、教育主体で全寮制で少人数で、とにかくいろいろ面倒を見てくれる。全米でもトップクラスなんですよ。日本では、だいたい知っているのはハーバード、イエール、プリンストンだとかそういう所ばかりしか知らないんですけども、実はアメリカのトップクラスの連中っていうのは、そういうところにも行くんです。リベラルアーツカレッジは結構多いですよ。ハーバードの大学院に行った時、どこの学部を卒業したかって見ていると、結構アメリカ人はそういうリベラルアーツカレッジのトップの大学行ってるのも多かったですね。日本ではあんまり知られていないんですけど、そういうのも面白いかもしれないですね。大学院ってみなさんどういうイメージをお持ちですかね。研究する場所っていうイメージをお持ちだと思うんですけど、アメリカの大学院って、日本

も今はそうなんですけれども2つに分かれていまして、研究する大学院と専門職大学院っていうのがあるんです。研究する大学院はまさに日本の大学院と同じで研究者になる研究をするためにいく所で、一方、専門職大学院、プロフェッショナルスクールっていうのがあるんです。例えばそれがビジネススクールであったり、メディカルスクールで医者になったり、あとロースクールとか、そこは大学院とは言っているんですが、まあ大学を卒業した人が行くんですけども、研究者になるためじゃなくてビジネスマンになるための、弁護士になるための、もしくは医者になるために行くような所なんです。そのトレーニングの場としての大学機関。アメリカは非常にそういうところが進んでいまして、ビジネススクールというのはまさにビジネスで世界で生きていくために行く所です。みなさんビジネススクールに興味があるか分からないですけど、ほとんどの人って最終的にはどこかの組織で働くわけじゃないですか。だからビジネススクールって対象が極めて広いんですよ。民間企業で働いてもいいし政府で働く人もいるし、NPO団体みたいなので働いている人もいます。みんな、結構ビジネススクールで学ぶといろいろ学ぶことがあってとても良かったです。なので、ビジネススクールをあんまり知らない方だったらぜひ一回調べてみてもらえればいいかなと思います。私は国際機関にもともと興味があったという話をしたんですけども、実は国際機関に入るにもビジネススクールって有利なんです。こういうの知られていないんですけど、だいたいね私の知り合いで開発が好きなおとなとかっていうと、国際関係論専攻とか開発専攻とかってあるんですけど、そういうところから国際機関に入るのは、結構激戦なんです。ただビジネススクールにも、私がいた頃は世界銀行とか国連とかがリクルーティングに来ていました。みんなあんまり興味なくて全然相手にされていない感じだったんです。私はそういうのに興味があったので、少し見に行ったりして歓迎されたんです。実はああいう所でも、途上国の開発とかビジネス的なセンスとか重要で、そういうスキルを持った人とか財務的なスキルを持った人とか、ものすごい求められているんですけども、ほとんど人が行かなくて「なかなか来ないんで何とかならないですか」って相談を受けたことがあります。実はビジネススクールっていうのはとても応用が効くプロフェッショナルスクールなので、もし興味があればぜひ私は個人的にお勧めにします。

個人的には留学の準備とか留学のプロセスでもものすごくいろいろ学んだことがあったかなと思っていて、日本の大学って、日本に限らず他の国もそうなんですけれども、まあ試験を受けて入るわけじゃないですか、でも試験ってみんな共通ですよ。共通の試験を受けて上から順番に合格が決まってくわけですね。それってみんな同じ基準で、要は同じことを他人より上手にやりましょうっていう競争なんです。みんなそうじゃないですか。高校とかもそうだと思うんですけども、みんな同じ授業を受けますからね。同じことをいかに他人よりうまくやるか競争をやっているわけですね。ですけど、ビジネススクールに入るアプリケーションテストってそういう視点じゃないんですよ、全然。共通のテストって一応あるんですけど、そういうのはあんまり関係なくて実はその点数っていうのは最低ラインをクリアしていればよくて、要は差別化ってことなんです。差別化って概念は結構難しく、ビジネススクールとかアメリカの大学院とかイギリスでもみんなそうだと思うんですが、他の大学院に行くにしても差別化ってことを意識しないで一所懸命やっている人ってあまりうまくいかないんですよ、私の周り見てもそうなんです。私は当時、結構差別化ってことを考えていて、周りの人が共通試験の勉強ばかりして点数が10点上がった20点上がったと喜んでる間に、エッセイで自分は何をしたいのかっていうことにすごい時間を使って書いたんです。結果的にはすごく良くて、日本の大学受験と同じような発想でテストの点が良いれば採用してくれるというふうに思っているとうまくいかないんですよ。そこがすごく発想の違いですよ。差別化って概念的にとっても難しいんですよ。すみませんちょっと資料が無いんですけど、僕は会社を経営しているんで、まさにこういうことを考えるんですよ。会社を経営すると、どうやって自分の会社のサービスを他の会社と違うものにしていくかって日々考えるんですよ。当たり前ですよ。同じものを提供したのでは誰もそんなもの買ってくれないですよ。実は自分を売り込むことと、留学とか学ぶってことも同じだと思っているんです。もちろん、みんなと同じ土俵で勝ち抜くっていうのも、一つのやり方ですよ。これは極めて厳しい世界で、勝者が一握りの世界なんです。ですけど、差別化って視点を入れると、他人といかに違うことをやるのかっていう視点の方が重宝されるんじゃないかと個人的にはすごく思うんですよ。さっき大学時代にルーマニアに留学しようと思ったけど止めたって言ったじゃないですか、あれ今から考えると本当にもったいなかったなあと思わしてね。そんな機会滅多にない訳じゃないですか。みんながカリフォルニアに行ったりニューヨークに行ってる時に、一人ルーマニアに行って、どうだっていうのが無いんですよ。やっぱりいろんな人を

見て思ったのは、私の知り合いで中央アジアのアフガニスタンに行ってる人がいたんですけども、何が良いかって、すごく治安が悪いのでそれは良くないんですけど、そういう所にいると日本人がこんな所に来てくれた、と現地の人からすごく歓迎される。もう一つは日本人が少ないですから、だいたいそのコミュニティの中ですごい知り合いが増えるわけです。その知り合いって、場合によっては日本から来た大臣であつたり日本大使館の大使とか。そういうのはニューヨーク行くとまずないですよ。ニューヨークで日本の誰かお偉い人とか有名な人が来ましたということで、日本人の一留学生に会うとか話をするとかないんですけども、マイナーな所にいるとそういう機会は結構多くて。現地でも歓迎されますし、日本人のコミュニティの中でもいろんな人といろんな風に触れ合うことができるので個人的にはお勧めします。みなさん多分今まで同じ物差しの中でいかに上手くやるかっていう競争があつたと思うんですけども、ぜひちょっと違う競争も考えてみていいんじゃないかなという風に思います。

それで、少し話を進めるとハーバードのビジネススクールってこういう感じの授業をやっているんです。ディスカッションなんです。私はハーバードに受かったのは嬉しかったんですけど、行こうかどうか本当に迷つたんですね。というのは、すごい厳しいって知っていたんです。何が厳しいかっていうとこういう授業なんです。80人くらいでみんなディスカッションするんですよ。先生の講義じゃなくて全部ディスカッションなんです。ビジネスの状況が書かれたケースっていう30頁くらいの冊子を読んできて、あとはひたすら90分みんなで議論するっていう世界なんです。で、何が起こるかという、みんなすごい手を挙げるんですよ。なぜかという、成績の半分はいい発言をしたかどうかで決まるんです。日本じゃあり得ないですよ。日本はペーパーテストを頑張ればいいんですけど、そうじゃなくてみんなの前で堂々と意見を言えるかどうかで成績が決まる。で、成績が悪いとどうなるかという、退学になる。しかも成績が相対評価なんです。ものすごく厳しいです。相対評価って何かというと、絶対評価というのは例えば80点取れば合格なんですけど、相対評価はそうではなくて上から何%がA、真ん中何%がB、下から何%がCと、だから必ずCがでるんですね。で、Cが何個か貯まると、厳しい場合は退学。実際に退学になる人はいたんですけど、そういう世界なんです。なのでとても厳しくて、正直言ってこの授業に実際参加してみて、本当にこれヤバいんじゃないかと本気で思いました。ほとんどみんなネイティブの世界で、英語でハンデを負っているんです。外国人でもみんなアメリカの大学に行っていたとかいう連中ばかりだったんですね。ほんの一握りだけなんです。アメリカでの経験がほとんどないか1年くらいしかないっていうのがね。こういう厳しい世界で私も頑張ってやってたんですよ。なので、初めは本当にまずい、どうしようと思って。ミシシッピの時も同じなんですけど、日本にいるとそこまでまずいっていう経験は無かつたんですね。大学に入る時も、大学って楽しいなって思って入ったわけなんです。外語大に入って、授業が厳しくてついていけないなんていうのは無かつたんです。けれども、ミシシッピにいたときはとにかくついていけなかつたですからね。こっちに行ってまたついていけなかつたんです。けれども、ミシシッピにいた経験があつたんで、まあついていけないんだけど、頑張ればなんとかなるかなという自分なりの自信というか、不安なだけですけども何とかしようというのはあつたんで、それが良かったかなって思ったんですね。さっきも言いましたが、授業の違いとかそういうのもあって、本当にカルチャーショックがすごかつたんですね。なので、授業のスタイルも違うし試験も違うし、またそういう試験も当然選択問題なんかなくて、5時間くらい論述だけっていう世界なんです。だからすごい鍛えられたっていうのがあります。なので、みなさんこれからいろんな形で留学を考えられると思うんですけども、決して楽しいだけが留学じゃないと思いますから。厳しいだけが留学でもないんですけど、そのミックスで、時にはね非常に厳しい世界に自分の身を置いて、日本じゃなかなか経験できないくらいがむしろにやって、それが役に立つというのはあるなど。いろんな経験をしたんですけどもその中でいくつか感じたことをちょっとお話すると、一つは交渉ということなんです。アメリカの大学に行ってすごく思ったのはこれなんです。日本の大学に行って、ほとんど交渉するっていうことは無かつたんですね。交渉っていうのは大学側に何か言うとか、何とかしてくれと言うとか。アメリカに限らずですが日本はちょっと特殊な社会で、海外に行くときだいたい交渉事で物事決まることが多いですよ。声高に言わないと通じないというのがあって、例えば留学の交渉事って何かというと、私、ハーバード以外の大学にも合格していたんです。ハーバードに行こうと思ったんですけど、ハーバードが嫌だったら移れるようにしておこうと思ったんですよ。小心者ですからね。で、他の大学に手紙を書いて、1年留学をリファアらせてくれと、要は延期させてくれと。別にハーバードに行くからどうかは言わないですよ。日本の大学ではそういうのまず無理じゃないですか、そんな無茶苦茶な

話。受かったんだけど来年にしてくれて話なんですね。アメリカの大学は結構気前良くて、1年後に用意しておくからぜひ来て下さいっていう、要は合格を与えたものに対しては、別に今だろうが1年後だろうが別にいいよっていうスタンスなんですね。それも交渉事なんですよ。例えば教授も交渉事なんですよ。私も行って、これはヤバいな、ついていけないなと思ったんです。ただ成績をつけるのは教授ですからね、とりあえず教授に会いに行って、自分は日本から来て英語が拙いと、こんな授業にはなかなかついていけなくて、僕は頑張るからなんとか当てくれと、多少まずくても評価してくれという話をしたんですよ。結構それって勇気のいる話でしょ。日本だとまずあり得ない話だと思いますよ。教授は意外とそういうところを丁寧に見てくれるんですね。わかった、お前も大変だなあ、と。確かにそれはハンディキャップがある。だからお前のことをよく見ておく、というふうに言うてくれてですね、結果的にはこれでOKだったんですね。あと就職もね、結構交渉なんですよ。給料も交渉です。いくら貰えるかっていうのと、どういう条件を出すかっていうのと。私もコンサルティング会社に内定を貰った時の給料もそうですけれど、いろんな条件、引越し代をどうするかとか全部交渉で。実際はコンサルティング会社に行かないで会社をつくったんですね。会社をつくるときにも、会社をつくって半年で潰れるかもわからないから、コンサルティング会社に1年間待ってられないかって話をしたんですよ。そうしたらそれもOKだったの。日本ではなかなか経験ないですけど、アメリカへ行ってお金の面とかいろんな交渉をしてそういう度胸がすごくついたなあというのがありますね。そういうことをやったらいけないんじゃないかと日本にいたら思ったんですけどね、実はそうでもなくて。あと、ちょっと違う視点で物事を見るというのがだいぶ出来たかなあとと思いますね。授業で発言する時に、アメリカ人みたいに上手く話せないでごまかし効かないですね。アメリカ人見ると結構適当なこと喋ってごまかすんですよ。僕も日本語だったらごまかすんですけど、何しろそれが出来ないんですよ。だからとにかく一生懸命考えて他の人が言わないようなことを考えるということをして2年間ずっとしてきましたからね。そうすると気づかないうちに、何かこう複眼的な思考と言いますかね、多分これは他の人も言うだろうから、これは止めておいて絶対みんなが考えてなさそうな視点で発言しようっていうのを考えていました。結果的にそういうのが十分に役に立ったかなと思っています。

向こうにいる間にちょっと遊びでグアテマラにスペイン語留学をしたんです。とてもきれいな所で、こういう所いいですよ、これが1週間ホームステイと個人授業付きで150ドルくらいで留学できるんです。日本で暮らすよりずっと安いじゃないですか。だからもしお金がどうっていう話であれば、こういう所に留学するのもありかなと思うんです。

最終的に思ったのは、いろんな経験をしたんで何とかなるかなという自信がついたとか、海外でいろいろ苦労したおかげで、いろんな副産物を得たと思います。英語を学ぶとか大学行って経営学を学ぶと思っているんですけど、実はさっき言ったように、他人と違う視点で物事を見ることができるようになったとか、そういうものが生まれてきたかなと思っているんですよ。本当の目的はこれだったんだけど、実際に今自分にとって役に立っているのはこういうものだった、ということがあるんでね。有名な話を引き合いに出すと、スティーブ・ジョブズというアップルの創業者がいますけれど、彼だって大学をドロップアウトした後に暇なんで大学でカリグラフィーの授業を聞いていたんですね。カリグラフィーってわかりますか。綺麗に文字を書く技術、デザインの技術ですよ。なんで彼がそれを取っていたかという、別に目的はなかったらしいんです。単におもしろいから取っていたと。だからそのカリグラフィーを取って何の役に立つのかという、はっきり言って役に立たない訳ですよ。だけど結局彼はそれをその後アップルコンピュータをつくる時に、フォントのデザインとか文字のデザインとか、あとアイポッドとかそうですけれどもデザインが他のコンピュータとは違うんですよ。そのデザイン性っていうのは多分、彼がカリグラフィーをやることで身に付けたんだろうなと、それが後に繋がるんだなあと思っていて、主目的は何であれ、それがスペイン語であれ英語であれ経営学であれ、何でもいいんですけど、何か一生懸命やると意外にこういうものが身に付いたなっていうのは、私は今実際に会社を運営してきて思います。特に留学していると、そういうのがよく身に付くんでね。これから私もね、実はまだまだ留学しようかなって思っているんですよ。どこか辺境に留学したいなと思っていて、辺境っていうとちょっと失礼になってしまいますけれどもどこかアフリカの方とかね、アジアの知らない国とか、そういう所に留学して差別化していくのも面白いのかなと思っていますよ。

最後に、留学を躊躇させるものにはいろいろあると思うんですね。お金とかタイミングとかいろいろあると思うんですけど、ただ最近インターネットでいろいろ情報を調べることができるんで、私もちょっと調べてみたんですよ。そうすると、安く行ける方法っていくらでもあるみたいですね。もちろん生活費が安い国に行くっていうのもあるし、大学がそもそも安

い国っていうのがあるんですよ。日本って基本的に高いですから、ヨーロッパの方って国立大学とかって結構無料なんですよ。日本人が入るにはもちろん制限はあるかもしれないですけど、まあそういう国もあるっていう事もすぐに調べることができる。あとアメリカの大学、さっき申し上げたんですがハーバードもすごくファイナンシャル・エイドっていうのが充実しているわけですね。なので、合格してしまうとあとは交渉事で、実はいくらでも援助してくれるっていう制度が結構あるんです。なので、今日本で暮らしているお金を考えると、お金ってというのはそれによって難しいってことはあまりないんじゃないかと思うんで。結構いろんな理由で難しいって考えていらっしゃるかもしれないんですけど、それは調べてみられると必ず解決策はあるかなっていう風には思いましたんで、ぜひやってみて下さい。

ちょっと駆け足になっちゃったんですけど、私もいろんな留学をしている友達がありますが、みなさんも知り合いがいるかもしれないですけどね、まあ留学して後悔しているっていう人は殆ど聞いたことがないかなと思います。ただ、留学をしなくて後悔している人っていうのは聞いたことがあります。それは自ずと明らかで、何か外へ出て違う体験をするというのは、その人にとっては必ず何かのプラスがあるんだろうと思いますので、多少勇気がいるとは思いますが、ぜひどんな形であれ外で学んで刺激を受けるっていうのは、しんどい時もありますけれど、非常に面白い体験なわけですよ。ぜひ今日の話が少しみなさんの参考になって留学するきっかけになればと思います。これで終了します。どうもありがとうございました。

### (質疑応答)

**質問者:** 会社員の川鍋と申します。今日は非常に興味深いお話をありがとうございました。質問が2つあるんですけど、もしかしたら失礼か変な質問なんですけれども、いろいろ留学されてメリットがあるというか、いいことがあるという事がわかったんですけど、もし留学されて何かデメリットというものがもしありましたら、それについてお話を聞かせていただけたらと思います。あともう一つ、2つ目の質問なんですけれども、国や県でグローバル人材の育成っていうのをやっているんですけど、それについてはどう思われるか。日本がグローバル化することについて、こういう国になったらいいとか、そういう何か将来像というかありましたら、お聞かせいただければと思います。

**柴田さん:** そうですね、デメリットという個人的には無かったんですけど、人によっては中途半端な留学とかね、語学学校で無目的に1年過ごしてしまっただけっていうのはちょっとありますよね。だからそれで、語学学校っていいんですけども、微妙なところもあるんですね。語学が目的になっちゃいますから。個人的には語学を目的に、始めはいいんですけども、最終的にはその言葉を使って何かを学ぶ方が上達が早いかなんかと思っているんです。なので、無目的にちょっと言葉だけでできればいいかなっていうので語学学校で1年過ごしても、お金も使って結局日本人の友達と遊んじゃって終わったというのはたまに見ますよね。それだったら日本で働いたり勉強したりしたほうがいいんじゃないかなんかと思っています。もう一つグローバルに関しては、そうですね、今ものすごい叫ばれていますね。何か日本が閉塞感があるからですかね。人口も減って経済もよくなって、格差も広がってというような話でね。まあ、総論は私も基本的に賛成で、日本人が海外に出ていくこともすごく重要なことだと思っているんですけど、もう一個は海外の人を日本に呼んでくるっていうところが、もっと出来ないのかなとちょっと個人的には思うんですよ。留学生をもっと呼んでくるって、日本ではあの計画がありましたけれど、結局、目標達成せずに何かうまくいかなかったみたいですけど、私の経験からいうと留学をした先に、特に若い時に留学した人にとって、その国のことをほぼ必ず好きになるんじゃないですか。私もミシシッピでもボストンでも大変だったんですけど、好きかって訊かれれば大好きですね。やっぱりそこは愛着っていうのが絶対生まれると思いますね。だから、日本に来る留学生がちょっと少ないんじゃないかなんかと思っていて、アメリカってやっぱりすごいのは、あれだけ留学生呼んでますからね、奨学金出したりして。だからアメリカは嫌われているところもあるんですけどファンも多いですよ。日本はどうかというと、留学生は圧倒的に少ないかなんかと思ってる。英語で授業ができないとかいろんな要因があると思うんですけども、本当は日本に来る留学生を増やせば、もっと親日的な国が生まれてもいいんじゃないかなんか。東南アジアなんかそうなんですよ。東南アジアから奨学金で日本に留学生を引っ張ってきて、その人達が帰って政府で働いたりして、

それがすごく親日的にパイプが繋がってという事があるわけですよ。日本人が海外に出ていくのもそうなんですけど、海外の人が日本に来るように、積極的に国とか県とかがやってもらえると、個人的な利益は何もないんですけど嬉しいかなと思います。

**質問者:**小沢と申します。よろしくお願ひします。本日は娘の留学について、勉強になるかなと思って参加させていただいているんですけども、留学する時期のタイミングと、それと娘ですとか子供を留学させるにあたっての親の心構えみたいなものがあれば。また逆に先生が体験して、親にこうやったら迷惑がかかったとか、親がどうだったとか、何か実体験があれば、ぜひ教えていただければと思ひまして、よろしくお願ひいたします。

**柴田さん:**私も子供として留学したのと、また親としてまだ小さいんですけど4歳の子がいるんで、この子をいつ留学させようかっていうのをちょっと考えてはいるんですね。個人的な話をすると、時期については結構難しい問題だと思ひていまして、早すぎても駄目だと思ひているんです。小学生とかで家族で海外に行く機会があれば、それはそれでいいと思うんですけど、ただそういうケースって、大抵その後言葉を結構忘れるっていうことも多くて、日本に帰っていじめられてとか何とかいろいろあるじゃないですか。私自身としては高校生で1年行って、それはそれで良かったなと思ひているんです。ただ高校生で1年行って大学院で2年行ったくらいでは、英語の力という意味では不十分だと思ひています。なので、例えば高校生くらいになりますとひとりで行けますから、高校で1年行って大学でまた1年か2年行って、くらいの経験ができればいいかなと思ひているんです。ベストは中学生か高校生くらいで家族と一緒に行ければいいかなと思ひていて、高校生は一人で3年とか仮にいと、もう本当に日本語を忘れますね。僕は1年でそうだったんですよ。若い人って吸収力すごいですから、日本語を忘れちゃうんです。日本語忘れると何が不便かという、英語も不十分ですから、言葉は帰ってくればすぐ戻るんですけど、読解力となると、日本語の文章を正確に読めるか、日本語を正確に書けるかというのは、ものすごく力が落ちるんですよ。だから私がアメリカの大学に行っていたら、家族と一緒にじゃないから日本語もあまり話さない環境で、日本人として仕事をするのには中途半端で、アメリカ人でもないという何かものすごく中途半端な感じになってたかなという気がするんですよ。なので、一人で行く場合っていうのは、あまり長く行き過ぎると、もしかしたら中途半端になっちゃうかもしれないので、本当は家族も行って、生活の基盤が日本語で学校に行くと英語とか何かそういうのができるいいと思ひます。昔はちょっと英語ができれば生きていけた時代ってあったと思うんですが、今はそうじゃない。英語ができる人はいくらでもいるんで、それだけで食えるかっていうと食えないんですよ。じゃあネイティブ並みにできるようにならないと食えないかっていうと、ネイティブ並みにできるためには日本を捨てないとダメですからね。そうするともう日本人ってことは関係ないじゃないですか。そういう世界で生きていく人もいるんでしょうけれど、日本人として生きていくんだったらベースの日本語がしっかりしていないと中途半端になっちゃいますから。まあ答えがなかなか私も無いんですけども、いろんな悩みながら子供のことはどうしようかなって思ひてます。